

はじめての商い（下）

お客様が商品ボードを見下ろしながら「孫が身に着けるようなものなどあつたらいいわね」、「ストールなどあれば・・・」、「ベストなどないかしら？」などと今後の参考になるであろう注文をつけてくれる。そうした「意見を挟みながら色変わりで用意したペットボトル入れやプチショールなど小物類、花瓶敷きやテーブルクロスの売れ行きがよい。

同時に、身に着ける物には近くに鏡が必要であることや時季を得た物をもっと揃えるべきであつたことなど反省点も気付かされた。そうしたことは微塵も考えに及ばなかつたのである。

また価格も安すぎるようだつた。お客様の「海外でも同じような物を売つていたが、『こんなに安くない』をはじめ、一様に「安い」「こんなに安くいいの？」の圧倒的な声。糸代にほんの僅かプラスした程度で、手間賃があまり掛かつてないのだ。

まさに素人の馬脚をさらしながらであつたが、気分は上々となつた。

割と大きな注文が成立しそうな話も持ち上がつた。「商売を手掛けているらしき女性が大きなテーブルクロスの話を持ち出したのだが、手許に用意してないこともあつて結局成立までには至らなかつた。念のため、いづれ連絡に繋がるかと予め用意してあつた妻・生涯初めての名刺をお渡しした。インターネットにホームページを立ち上げて店を構えれば、何らかの可能性が生ずるかも知れないと頭をよぎつたシーンである。



昼時を過ぎて、僕が先に食事に向つた。まるで地の利の無い神楽坂。今日は早急に腹を満たすだけ。適当にメインストリートに面したうどん店に入った。そこで大してうまいとは思えないきつねうどん、腹よりも気分が満ち足りた。早々に店を後にして、さあ又ひと仕事と気合を入れ直して毘沙門天・善國寺境内に戻った。

眼を疑つた。

妻が座るたなの商品ボードには品物が無く、「売り切れ」の札が置いてあるではないか！妻がにっこにこしている。開店から三時間、閉店までまだ三時間を余す。商品がはけてきたとはいえ、僕が昼食に席を発つた際にはまだほどほどに残つていた筈が！

妻の話によると、売り切れが分かつて、周囲から拍手が沸いたそうだ。誇らしい気分で他のブースを見て回つた。我がたなと同じような売り切れの札が僅かながら散見されてはじめて、実感が沸いた次第であつた。

そして揚々と帰宅。

今や皮算用でない、非常に楽しみな実勘定の時間を迎えた。布袋から吐き出された紙幣、硬貨を勘定する妻の手許を供に働いた小生も高鳴る気分で覗き込む。

先ず数量で一番卖れたのが三百五十三リットルのペットボトル入れ二点（単価五百円）。次に小さなドドリー七点（単価三百円）。価格でまとまつたのが丸いテーブルセンターサイズ、計三万円ほど。仔細を表計算ソフトのエクセルに打ち込む。

何と、合計五万六千八百円。大層な金額でないだろうが、初めての商いの我々にとって、三時間でこの売上げ！などと儲け度外視の単純な頭でびっくり。兎にも角にも思つてもみない売上げに大満足である。

季節物の取り揃え不足や値段設定など反省点多々あるものの、ま

ずっとしたい。

そして、それ以上に嬉しい知らせが届いた。

「ここからは、浅ましいほどの「自慢話」。お見苦しい限りとなります故、網掛けにてご報告。

雑誌「いきいき」の誌面、十一月号に妻手作りレース編みのペットボトル入れが紹介されたのに続いて、翌年三月号には、読者の作り方「教えて！」の声に応えた格好で誌面紹介されたのだ。

「教えて！」の声にお応えします、のサブタイトル。そして「レス編みの春色ペットボトルカバー」と題して、作り方の説明が二頁に亘っている。雑誌社の電話取材に妻が応えた内容だ。

グラビアで二種類のボトル入れが大きく掲載され、パステルカラーのピンク・黄色の二色編みと、若草色・薄水色・淡紫色のグラデーションのもの。いかにも春らしい色合いで、妻作成二つのボトルがまさに誇らしげに踊っているではないか！

そこには小生が妻の要望にしたがって作画ソフトのイラストレータで作成した編み図も添付されて、つくりかたの一助となっていた。この雑誌掲載は妻の人生経歴に箔を着けたに相違ない。

斯くして、初めての商いは代えがたい貴重な体験となり、神楽坂は得がたい思い出の街となつた。

(了)